

観光地における事業者の ICT 活用の実際と e-learning による地域教育の在り方

古市 恵美子

福岡国際大学

国際コミュニケーション学部

furuichi@fukuoka-int-u.ac.jp

概要：福岡国際大学が位置する太宰府市は、年間 700 万人もの参拝客が訪れる太宰府天満宮のある観光地である。デジタルメディア学科では、ICT による地域貢献の取組みとして太宰府市商工会との共催で、事業者向けパソコン講座を実施してきた。講座は毎回、事業者の取りまとめを行っている商工会との話し合いによって内容が決められ、学生スタッフによって運営される。これにより、観光地における事業者の ICT 活用の実際を知ることができるため、大学では観光業への就職を希望している学生の就職に結びつく ICT 教育を行うことが可能である。さらに今年度からは、これまでのパソコン講座の教材やインターネットビジネス関連の教材等を用意し、事業者と学生への e-learning による提供を開始した。本学科の e-learning による地域貢献について報告する。

1 はじめに

福岡国際大学は、1998 年に開学した文系の大学である。全学的な語学教育と情報教育をうたって開学したが、開学時は語学や情報の専門ゼミがなかったため、これらの学びを期待していた学生からは不満の声があがっていた。それに加え、情報通信技術（以下 ICT と略す）の急速な高度化・多様化に対応できる人材育成が強く求められる社会情勢になってきたため、2003 年にデジタルメディア学科が設置された。

このデジタルメディア学科では、それまでの基礎教育としての情報処理教育を発展させた「インターネットとコンピュータを用いたビジネス展開を視野に入れた情報教育」を行ってきた。地元の観光地である太宰府市との提携もその一つである。ビジネスでは ICT は必須となっているが、実際に使いこなすためには幅広い ICT スキルを身につけなければならない。学科の専門教育には、基礎的な ICT スキルを学ぶ科目から、システム開発やデジタルクリエイターに関する専門科目まで幅広い科目が用意されていたが、社会でどのような ICT スキルが必要となるのかを学生が理解していなかったため、狭い範囲の科目しか履修しないという状況だった。このため、社会でどのようなスキルが求められているのか体験できる機会が必要と考え、2004 年度から地元である太宰府市と提携した地域貢献活動で現場等を体験させることにより、実践型の人材育成教育を行った。社会ではどのような技術が求められているのか、自分に不足しているものは何かを考えさせられる状況や、アン

ケート等を通して得られた学外者からの意見は学生自身の課題を確認させることになり、学生に大きな刺激となってきた。

本論文では、デジタルメディア学科において行ってきた観光地太宰府の事業者への ICT 教育について報告する。

2 観光地太宰府の現状と就職

太宰府市は、福岡市の南に位置する人口 7 万人の都市で、「学問の神」と崇められている菅原道真公を祀った太宰府天満宮がある、福岡を代表する観光地である。太宰府天満宮には、年間 700 万人もの参拝客が訪れているが、ほとんどは太宰府天満宮を中心とした短時間の観光である。市内には大宰府政庁跡や水城跡に代表される史跡が多く存在するため、市は、歴史的建造物などの保全・活用等により歴史的風致を将来に伝えるまちづくりを推進し、観光基盤の整備充実により、さらなる観光客増をめざしている。

福岡国際大学と太宰府市との提携は、本学に観光業への就職を希望する学生が多いことも理由の一つである。観光業は観光に関連する業種の総称であり、その代表は旅行代理店などの旅行業やホテルなどの宿泊業界である。1 年生に対して行っている就職希望調査では、希望業種が決まっていないという回答を除けば、第 1 希望業種として旅行業や宿泊業をあげる学生が最も多い。図 1 に、2012 年度の就職希望調査の結果を示す。2012 年度は 24%、図にはないが 2011 年度は 30%の学生がこれらの業界を就職先として希望していた。

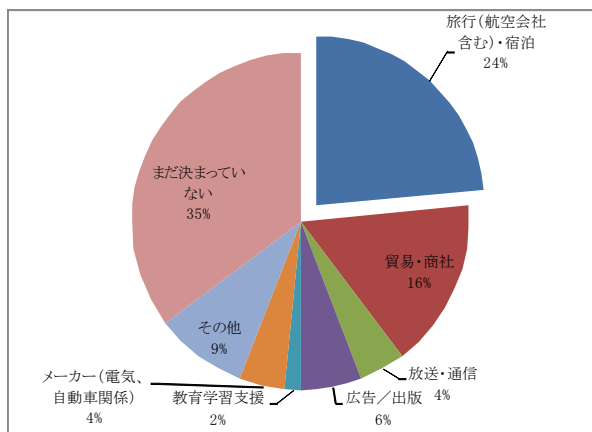


図1 2012年度就職希望調査結果



図2 福岡国際大学動画サイト

3 ICTによる地域貢献の概要

魅力あるまちづくりをめざす観光地太宰府にデジタルメディア学科として何ができるかと考え、始めたことの一つが太宰府の魅力を映像で伝えることである。学科には映像ゼミがあるため、学生が卒業制作で作成した太宰府市の紹介動画を無償で提供することを太宰府市に提案し、市と協定書を交わして毎年太宰府市に作品を提供してきた。観光地である太宰府には、動画にする題材が多く存在する。太宰府市の紹介動画は、“観る魅る太宰府”というメインテーマのもと、太宰府の歴史、文化、観光、環境、教育、暮らしなど大学と太宰府市が毎年内容を事前に話し合っ決めていく。これまでに太宰府市に提供した動画の年度テーマは、表1のとおりである。

表1 “観る魅る太宰府”シリーズのテーマ

年度	テーマ
2006	ようこそ太宰府へ
2007	太宰府に生きる
2008	いっしょにやらんね
2009	お元気です！筑紫人
2010	統一テーマなし
2011	統一テーマなし

これらの映像は、提供直後は太宰府市のホームページで公開されていたが、その後本学に動画サーバが構築されたため、現在は太宰府市ホームページから大学のホームページへリンクを貼り、大学の動画サイトで一般に公開されている。

次に、学科として取り組んだのが、観光地太宰府の事業者へのICT教育である。これは、太宰府市商工会と提携して行っている。太宰府市商工会では、太宰府で商売する人・太宰府で起業する人をバックアップしており、セミナー等を開催している。その一つとして地域事業者のICTスキル向上のためにパソコン講座が行われていたが、商工会ではパソコン台数が限られていたことから、十分な数のパソコンが準備できる大学においてパソコン講座を実施してもらいたいとの要望があり、学科と太宰府市商工会と共催で地域の事業者向けパソコン講座を実施することになった。

4 地域事業者向けパソコン講座

太宰府市商工会との共催による地域の事業者向けパソコン講座は、2008年から実施している^[1]。一般人向け講座と異なり、対象が地域の中小事業者に限定されるため、ビジネスに使用できるパソコンの使い方を学ぶことができる内容にしている。また、学生スタッフに講座を運営させるため、学生にとっては、卒業後に社会でICTに関するどのような知識や技術が要求されているかを実際に行うことができる良い機会となっている。

4.1 講座のテーマと運営体制

講座のテーマは、地域事業者のICTスキルに関する商工会の意見を参考にして学内で検討し、商工会と協議の上、決定した。個人商店主が多い商工会会員を対象としているため、“自前でできる広告”をメインテーマとした。

1年間に実施する講座数は、毎年商工会と話し合いの上で決めている。1回の講座時間は2時間である。講座の運営は、大学と商工会が共同で行っている。商工会は会員である地域事業者への講座

の案内と受講受付を担当し、大学側は講座の実施を担当している。大学では、講座の講師と補助を学生スタッフに担当させ、トラブル時に教員が対応する体制をとっている。

毎年、まず講師となる学生スタッフを決め、講師となる学生スタッフと講座担当教員が商工会側担当者と講座内容を打合せている。講座内容決定後、講師担当の学生スタッフが教材作成を行う。補助を行う学生スタッフたちは、事前に講座内容を練習しておき、講座の実施前には学生スタッフ全員で打合せが行われている。

4.2 講座内容

2008～2012年度の講座内容は、表2の通りである。

表2 パソコン講座の内容

年度	内容	使用ソフトウェア
2008	1. 画像の加工方法と印刷	ペイント MS-Word 2007
	2. 年賀状作成	MS-Word 2007
	3. 広告チラシの作成	MS-Excel 2007
2009	1. 広告チラシの作成	MS-Word 2007
	2. Excel 入門講座	MS-Excel 2007
2010	1. DM はがきの作成と宛先ラベル印刷	MS-Word 2007 MS-Excel 2007
	1. PowerPoint 入門	MS-PowerPoint 2007
2012	2. Word で作るお店通信 (予定)	MS-Word 2007

テキストは、毎回講師となる学生スタッフが講座の進行を考えながら作成している。



図3 学生が作成した教材の一部

内容によっては、1つの講座用テキストが30ページ以上の大作になる場合もある。講座では、講師が作成したテキストが受講者に配布され、テキストに沿って進められる。各講座の受講者数は20～30人で、2008年から2011年までの受講者数は、のべ160人にのぼる。

講座のレベルは、学生が講師をするため、初級・中級レベルである。募集にあたっては、講座内容を決める時に想定した受講者のパソコン技術レベルを明記している。最初に実施した2008年は、初級、中級者を対象とした講座を別々に用意したが、実際には、初級中級の別なく、ほとんどの受講者がどちらの講座も受講したため、初級者・中級者が混在した講座となり、中級者からは「進行が遅い」という不満があった。スムーズに講座を進行するには、受講者のパソコンスキルのレベルを揃える、または細かいレベル別クラスを設定することが必要であるが、現実には実現するのが難しかった。受講者レベルを揃えるため、それ以降の2009年からは、受講者の実状に近い初級者を対象とした講座を行うようにした。

4.3 受講者による評価

講座終了後に行ったアンケート結果から、講師の学生に対する評価を、表3に示す。アンケートは、5が最高、1が最低という5段階評価で行ったため、結果は平均値で表した。

表3 講師への評価

年度	進行速度	教え方	総合評価	
2008	1	4.3	4.5	4.6
	2	4.1	4.4	4.6
	3	4.0	4.2	4.6
2009	1	4.5	4.9	4.6
	2	4.3	4.6	4.7
2010	1	4.3	4.6	4.8
2011	1	4.2	4.4	4.4

講師は、高校「情報」教職免許課程履修者で教育実習を経験した4年生がつとめることがほとんどだが、4年次の教育実習に向けた練習のために3年生が講師をつとめる場合もある。全講座の中で、

教職課程履修者以外の学生が担当したのは、2011年の講座のみであった。受講生からの評価では、この講座を担当した講師への総合評価が最も低かったため、1年から教員を目指して教職課程での学習を行ってきた学生との差が認められる結果となった。

表4に、受講者自身の理解度と、講座が参考になったかについてのアンケート結果を示す。アンケートは、5が最高、1が最低という5段階評価で行ったため、結果は平均値で表した。

表4 講座への評価

年度		理解度	参考になったか
2008	1	3.9	4.9
	2	4.0	4.9
	3	4.4	4.9
2009	1	4.6	4.4
	2	4.3	4.7
2010	1	4.2	4.7
2011	1	4.1	4.6

2011年までの講座の中で、最も受講者の理解度が低かったのは、2008年の第1回講座「画像の加工方法と印刷」だった。これは、内容と使用するソフトウェアの種類が多かったことが原因と考えられる。「デジタルカメラの撮影方法」、「パソコンへの画像の取込」、「画像の加工法」と3つを組み合わせた内容で、画像の加工法として「ペイント」と「MS-Word」の2種類のソフトウェアを使った講座であった。

2010年と2011年の講座についても、理解度がそれぞれ4.2、4.1と少し低かった。2010年については、宛名ラベルの印刷にExcelとWordの2種類のソフトウェアを使ったことと差し込み印刷機能を作ったことで難しく感じたのではないかと考えられる。また、2011年の講座は、初めてPowerPointを使う人を対象としていたため、どのようなことに使うソフトウェアかを理解することから始めることになり、理解度が低かったものと思われる。

講座が参考になったかについての評価は、受講者の満足度を示していると考えられる。表4に示すとおり、理解度が低い内容の講座の方が参考に

なったとの評価点が高かった。このことから、受講者が理解しやすいようにと考えて内容を簡単にしたり進み方を遅くしたりすることは、必ずしも受講者の満足度を上げるものではないことがわかった。

4.4 講座内容への要望

講座終了後には、次年度に向けて受講者が望む講座内容についてのアンケートも行っている。図4に、2011年のパソコン講座終了時に行った受講者アンケートの結果を示す。

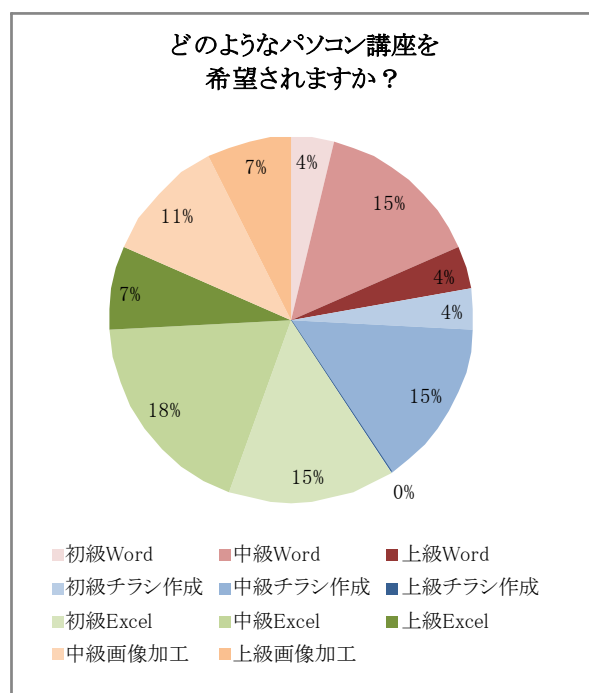


図4 2011年度受講者アンケートから

初級・中級・上級をまとめると、2011年はWord希望者23%、チラシ作成講座の希望者19%、Excel希望者40%、画像加工講座の希望者18%と、Excel講座を希望する人が最も多かった。表5に、これまでの希望をまとめたものを示す。WordとExcel講座を希望する割合は年度により異なるが、常に60%以上がWordとExcel講座を希望していた。

表5 講座内容についての要望(2008～2011年度)

年度	Word	チラシ	Excel	画像
2008	33%	25%	25%	17%
2009	22%	16%	46%	16%
2010	34%	18%	31%	17%
2011	23%	19%	40%	18%

5 e-learning による地域教育

パソコン講座終了後に行ったアンケートでは、定期的な講座を望む声があることがわかったが、大学では授業があるため、対面式のパソコン講座を定期的実施することは困難な状況だった。そこで考えたのが、e-learning である。仕事で忙しい人でも、インターネットに接続できる環境とパソコンさえあれば、いつでもどこでも受講可能である。実際、パソコン講座では毎回、仕事の都合で開始時刻に間に合わない遅刻者がいた。仕事が忙しくて途中からしか参加できなかった人も、また仕事のためにパソコン講座を受講できなかった人も、e-learning であれば受講可能である。以上のような理由で、e-learning による教育を行うことにした。

本学には、在学生・卒業生向け e-learning サイトがある²⁾。HP 社製の DL320 (OS: RedHat Enterprise) 上に、オープンソースの学習管理システムとして広く利用されている Moodle を使って構築されたもので、資格試験対策やスキルアップ用教材が提供されている。この Moodle サーバは著者が管理しているため、これを地域事業者向けの e-learning に利用した。

Moodle では、パソコン講座やソフトウェア使用法の教材等を用意し、自学学習できる環境を整備している。現在の教材には、パソコン講座コース、ソフトウェア使用法の教材として PowerPoint コースと Excel コースの 2 つのコース、その他としてインターネット・ビジネスコースとホームページ作成コースが用意されている。

パソコン講座コースでは、講座で使用した説明スライドとテキスト等を掲載している。この他、講師が説明する様子を撮影したビデオがあるため、編集して、今後説明動画を掲載する。

ソフトウェア使用法の教材は、教員の指導のもと、デジタルメディア学科 4 年生が作成したものである。これまで初年次教育用として学内限定で公開していたが、地域事業者のスキルアップのため、学外にも公開することにした。

インターネット・ビジネスに関する教材は、本学の専門科目「インターネット・ビジネス」の一部である。今後の事業者のビジネス展開には、広報活動や受発注にインターネットの利用が必要と考えられるため、提供している。また、ホームページの作り方を学びたいという要望があったため、オーサリングツールを必要としないホームページの作り方の教材も提供している。

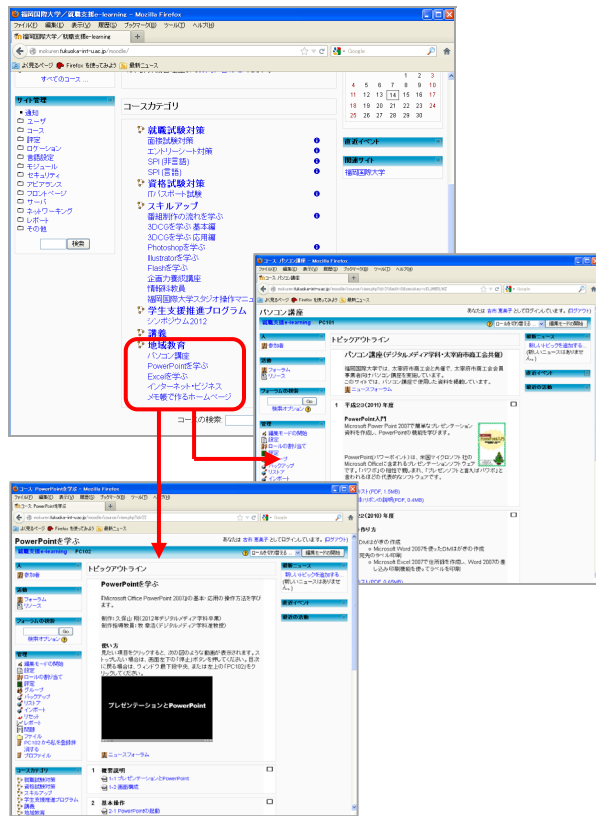


図 5 地域教育用 e-learning

6 学生に対する ICT 教育への応用

福岡国際大学では、現在 1~2 年次に 4 つの情報科目が開講されており、全て必修である。入学者のパソコンスキルは、出身高校や出身科の違いにより大きな差がみられるため、1 年前期では全学生のパソコンスキルをある程度揃えることを目標に授業を行っている。スキルの低い学生にあわせて授業が進められるため、コンピュータの扱いになれた学生からは、進み方が遅いと不満が出る場合も多い。特に、情報処理が得意だと思っている商業科や情報処理科出身者に多い傾向である。しかしながら、このような学生に、実際にパソコン講座で実施している内容をさせると満足にできないことも多い。これは、高校、特に商業科や情報処理科においては資格取得を目的とした内容が多く、入力の手速と正確性を向上させる練習や与えられた課題をそのとおりに速く仕上げることを重点的に学習していることが原因と考えられる。その結果として、入力は速いが、自分で考えて作り上げるものは苦手という学生が多くなっているようである。

このような学生に対して、地域事業者向けパソコン講座の内容は実践的な教材となる。小さな商店では、チラシが販売促進のための広報活動になるため、集客力アップにつながるデザインのよいチラシを作らなければならない。このため、大学では、単なるソフトウェアの使い方ではなく、工夫して表現する力をつけさせることに重点をおいた教育を行っている。例えば、図6に示すように、各学生に同じパーツを与えて、いかに工夫して目を引くチラシを作り上げるかというような実践的な教育である。

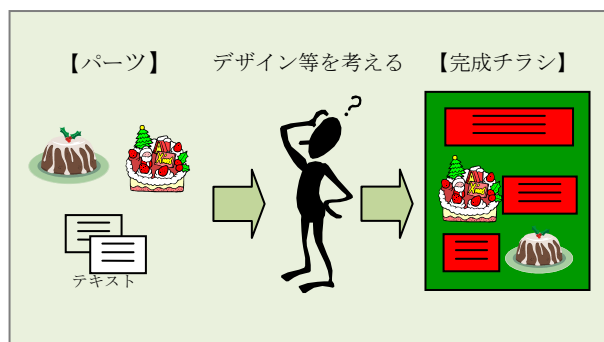


図6 自ら考えて表現力をつける課題の例

7 まとめ

デジタルメディア学科では、観光地太宰府への映像の提供や地域事業者向けパソコン講座などICTによる地域貢献を行ってきた。他大学で行われているような、商店街での活動等による地域活性化活動とは異なるが、地元の店主等にパソコンの活用方法を教えることで、自らの商店等を活性化する方法を学んでもらい、それによって地域の活性化に貢献するものである。対象を地域の中小事業者に限定して行うパソコン講座は、受講者の要望に沿った講座を実施することができ、また学生にとっては、卒業後にどのような技術等が要求されるかを実際に体験できる機会となった。

講座の実施にあたって最も気を遣ったのは、学生スタッフの選定と教育であった。講師を担当する学生は、教えることができる知識と技術、それに話し方や態度などを総合的に判断して選んでいる。講座の補助を行う学生については、大学で教育用システムの保守管理業務の補助を行う学生・アシスタント(SA)をしている学生にあたらせることが多いが、授業の一部として履修生に講座の補助をさせることもある。SAに比べてパソコンスキルが低い学生の場合には、講座

前には授業で指導するようにしている。

講座後のアンケートでは、補助を担当する学生に対する質問も用意している。挨拶、言葉づかい、コンピュータに関する知識、教え方などについてである。全体的に評価は高かったが、コンピュータについての知識に対する評価が厳しいこともあった。自分のスキルに不安を持っている学生の場合、質問されると必ず教員に確認することがあり、講座の受講者から見ると知識が低いと判断されたようだった。アンケートでの指摘は、卒業までの学生の課題を教えてくださいにもなり、「自分自身が雇いたいと思うような学生を育てる」という教育理念をあらためて思い起こすことになった。

今後の課題は、パソコン講座の受講者にe-learningを利用してもらい、e-learningによる地域教育を本格化することである。太宰府市商工会ホームページに掲載されている会員の中でホームページを保有している事業者は、約30%とそれほど高くはない。ホームページを含めたインターネットの活用は、今後の観光ビジネスに不可欠であるため、事業者はその活用方法を知ってもらうためにも学習ツールとして利用してもらいたいと考える。授業でe-learningに慣れている学生と異なり、地域の事業者には初めてe-learningを体験する人が多いため、どの程度浸透するかについては疑問が残るが、太宰府市商工会の協力を得て進めていきたい。

謝辞 e-learning 用教材 (PowerPoint を学ぶ、Excel を学ぶ、メモ帳で作るホームページ) を提供していただいた福岡国際大学牧幸浩准教授に感謝します。

参考文献

- [1] 古市恵美子、平川幹和子、「地域貢献活動による実践型情報教員養成」、平成 21 年度情報教育研究集会講演論文集、pp.241-244、2009 年
- [2] 古市恵美子、平川幹和子、「在学生および卒業生の就職不安と悩みをサポートする就職支援」、大学 ICT 推進協議会 2011 年度年次大会論文集、pp.87-92、2011 年